【佳作】

尾張金鯱考

―金鯱と尾張の人々の関係を求めて―

国際日本学部　歴史民俗学科２年
原 知之

序章

令和２年・３年は新型コロナウイルス（COVID-19）が世界各地に拡大し、今直その猛威を振るっている。こうした社会状況の中、令和３年名古屋の象徴「金鯱」が地上に降臨した。コロナウイルス感染拡大という異常な事態に疲弊している人々の支えになる事が使命とされ、名古屋城二の丸広場では「名古屋城 金鯱展」、名古屋の中心地栄では「名古屋城金シャチ特別展覧」がそれぞれ開催された。

令和３年６月27日、私は後者の「名古屋城金シャチ特別展覧」を訪れた。普段地上から仰ぎ見ていた金鯱が降りてくる。是非間近で見たい、その一心で金鯱の元へ馳せ参じた。私は金鯱を目の前にした時、その大きさに圧倒されるとともに、金鯱のこれまでの尾張の人々との関りに興味を抱いた。以上の経験を踏まえ、今回金鯱と尾張の人々との関係を研究テーマとして扱おうと考えた。

金鯱研究において、その第一人者である井上章一は著書『名古屋と金シャチ』において名古屋市民と金鯱との関係性をその歴史的変遷から明らかにし、現代名古屋に溢れる様々にデフォルメされた金鯱から、名古屋の人々と金鯱の関係について読み解いた（井上 2005）。

又、城郭考古学者である千田嘉博は『金鯱の歴史的意義』において寺院建築・城郭建築における鯱の在り方を日本と東アジアの交流を基に明らかにし、日本国随一の名古屋城の金鯱が新型コロナウイルス蔓延という世界的な危機にある中で令和３年に降臨する意義を説いた[(1)]。

近代美術史研究者の木下直之は著書『わたしの城下町 天守閣からみえる戦後の日本』で、近代から現代までの名古屋城及び、それに伴う金鯱の歴史的変遷を追いながら、それらの各時代の在り方を明らかにした（木下 2007）。

以上の先行研究がある中で、私は金鯱に対し尾張の人々が意識変化を起こした事象を時代順に５つ挙げそれを基に人々の金鯱観を読み解き、尾張の人々の金鯱に対する意識の変遷を明らかにする。終章では、各事象を通した尾張の人々の金鯱に対する意識変化の在り方を明らかにする。

現代において「金シャチ」「金しゃち」又「金のしゃちほこ」などとも表記される尾張の金鯱であるが、様々な表記がある中で本論文においては「金鯱」とその表現を統一する。その根拠を示すために「金」・「鯱」のそれぞれの字を用いる背景を示し、表記を「金鯱」と統一する根拠を明らかにする。初めに「金」を用いる根拠であるが、尾張の鯱に見られる特徴として一番に明瞭な点が「金」色である事である。後述するが、金であるが故に尾張藩から「非常用の財源」と見なされ、鱗の盗難の発生などの災難も経験してきた。金である事が尾張の鯱の運命を左右したのである。以上の背景から尾張の鯱に「金」という文字を用いる事は必然であると考える。

次に、「鯱」という文字を用いる根拠であるが「鯱」は「しゃち」の他に「しゃちほこ」と読む事ができ、平仮名・片仮名の「しゃち」「シャチ」を用いる事と比較し、江戸初期から現代までを扱う本論文においては「鯱」の字がより適当であると考える。以上の背景から本論文では「金」と「鯱」を含めた「金鯱」の表記で統一する。なお、論文や新聞等の引用などの引用文献は、引用元の表記をそのまま用いる事とする。

第１章　金鯱とは

はじめに、千田嘉博の『金鯱の歴史的意義』（中日新聞社 2021）、山田秋衛の『特別史蹟名古屋城』（名古屋城振興協会 1970）を基に鯱及び、金鯱の概要をそれぞれまとめる。

「鯱」とは何か。千田によれば鯱は「頭部は龍で胴体は魚、背中に尖ったひれを備えた空想の生き物」の事であるという。かつて古代中国の宮殿・霊廟の屋根の棟飾（正吻）には龍のモチーフが用いられ、龍は雨を降らせる霊力を持った霊獣として扱われた。こうした中国で成立した棟飾を日本の飛鳥・奈良時代の宮殿や寺院が鴟尾として取り入れた事に鯱の源流が存在する。鯱に「火除け」の意味が付加されるのは、棟飾のモチーフとされた龍が水を司る事がその理由であると考えられる。日本では古代以降も東アジアとの交流の中で鯱の原形が中国から継続的にもたらされ、日本における鯱のイメージができあがっていた。

山田によれば城郭建築において城郭の大棟の上に鯱が掲げられたのは、室町時代前期頃の城郭の形態ができた頃より始まったと考えられるという。鯱は城の装飾や城主の権威を示す象徴としてほとんど例外なく使用された。

又、千田は「金鯱」に関して、豊臣期までは鯱の全身に金箔を押したものは存在せず、前歯や牙、目、鱗などの一部が金で覆われたものが殆どであったと論じている。例としては、広島城の金箔鯱瓦（広島県広島市）、甲府城の金箔鯱瓦（山梨県甲府市）などが知られている。鯱全体が金箔で覆われるのは徳川期からと考えられ、名古屋城の金鯱はまさに徳川期の鯱の在り方を象徴するものであった。

名古屋城天守における金鯱は、慶長 17 年（1612）11 月に天守や櫓の鯱の使用を検討した基本方針とは別に大天守の鯱が特別に作られ設置された。大天守に鎮座した金鯱には徳川家康の平安の世を願う想いが込められ、金鯱を持つ尾張徳川家の威光をも示す事となった。

以上、千田嘉博の『金鯱の歴史的意義』、山田秋衛の『特別史蹟 名古屋城』を基に鯱及び金鯱の概要をまとめた。次に尾張の人々が金鯱への意識を変化させた事象を各時代ごとに挙げそれぞれ考察する。

第２章　名古屋城と金鯱

山田秋衛の『特別史蹟 名古屋城』によると、金鯱は建造当時慶長金で純度が約 80 パーセントと高く、金には厚みがあったという。雄鯱の全長は 2.57 メートル、雌鯱は 2.51 メートル、鱗の総数は雄 194 枚、雌 236 枚、金量は雌雄合わせ慶長大判で 1,940 枚であったと『金城温古録』に記録されている。こうした金鯱は「１里（3.9 キロメートル）余りの南方を通る東海道や、西方１里の佐屋街道、美濃街道の旅人の眼にも、また七里の渡しの舟人たちにも、小さいながら燦然と輝く金色が望見されて、東国から京畿、西国筋まで金鯱の評判がひろがっ」ていたという（山田 1970：138）。

人々には、

「見たか見てきたか名古屋の城を外は外堀、中は中堀、八つ棟づくりの銅瓦（あかかわら）、緑青（ろくしょう）がうかんで、金の鯱ほこ雨さらし雨さらし」

「てんかさまでもかなわぬものは金の鯱ほこ、雨さらし」

と、もてはやされた（山田 1970:139）。金色に輝く鯱が雨ざらしとなっている事に人々は尾張徳川家の豊かな財力を感じたと考えられる。このように尾張の金鯱はその建造当時から旅人等に注目された存在であった。

しかし、近世初頭において江戸城、大坂城など類例は少ないが、天守に金鯱を頂く城は存在していたと考えられている。江戸城に関してその中心であった本丸に３代将軍家光時代の寛永度天守以前に初代家康の慶長度天守、２代秀忠の元和度天守が築かれており、寛永度天守同様それぞれの城に金鯱があった可能性があるという（寛永度天守における金鯱の姿は３代家光時代の江戸を活写した『江戸図屏風』に描かれている）（中日新聞社 2021）。つまり、当時金鯱の存在は尾張国のみの特権ではなかった。

しかし、寛文５年（1655）の落雷による大坂城天守閣焼失、明暦３年（1657）の明暦の大火による江

画像１
『諸国名所百景 尾州 名古屋 真景』

戸城炎上により、金鯱を頂く城は次々と失われ、各天守の金鯱も運命を共にした。名古屋城はこうした中で炎上する事なく、日本国唯一の金鯱を頂く城となった。こうした状況下で他地域の人々が尾張の金鯱に注目する事は自然な事であったと考えられる。それは尾張の金鯱が日本国唯一無二の存在として改めて他地域の人々の目に映ったと考えられるからである。

金鯱は享保 15 年（1730）、藩財政ひっ迫の為１度目の金鯱改鋳が行われ、それと同時に金鯱には金網が取り付けられた。金鯱を覆った金網は第２次世界大戦中の名古屋空襲による炎上まで取り付けられ、金網を伴う金鯱の姿は人々に奇異な目で仰ぎ見られた（井上 2005）。こうした中でも金鯱に対する他地域からの注目は、尾張の人々に改めて金鯱に対する誇りを感じさせる機会を与えたに違いない。幕末期において２代目歌川広重が安政６年 (1859) に描いた『諸国名所百景 尾州 名古屋 真景』（画像１）では金鯱がその中心に描かれ、当時金鯱が尾張の名物であった事を示すものであると考えられる。

尾張国を除く金鯱炎上は尾張の人々に名古屋城天守の金鯱が唯一の存在である事を自覚させる機会となったと考えらえる。又、他地域からの金鯱への注目も同様に尾張の人々に金鯱が唯一無二の存在である事を自覚させただろう。こうした機会は尾張の人々に金鯱を「尾張の象徴」として意識させたと考えられる。

第３章　金鯱献上

金鯱を屋根から降ろし鋳潰した状態で明治新政府に献上する。明治３年（1870）当時名古屋藩知事であった徳川慶勝は新政府に対しこう申し出た。井上の『名古屋と金シャチ』によれば、慶勝の判断は過去３度に渡り行われた金鯱改鋳を受け継ぎ金鯱を潰した状態で献上しようとしたとするもの、又、尾張徳川家が徳川御三家の１つを構成する大名で新政府に打倒された旧勢力の代表格であった為、新政府に対し恭順の姿勢を示し金鯱を貢物として献上したと解釈される（井上 2005）。又『金鯱の歴史』によれば、慶勝は金鯱を「無用の長物」と見なし、新政府の資金として活用してもらうために献上したと論じられる [(2)]。

こうした先行研究を踏まえ、はじめに金鯱献上の背景とその根拠を NHK プラネット中部編『写真家大名・徳川慶勝の幕末維新 尾張藩主の知られざる決断』（日本放送出版協会 2010）、櫻井芳昭の『幕末の尾張藩』（中日出版社 2008）を基に明らかにし、その後金鯱献上が尾張の人々の意識にどの様に影響を与えたかを考察する。

櫻井によれば、慶勝が尾張徳川家 14 代藩主となる以前の尾張藩は過去４代に渡り幕府からの押し付け養子が続いた時期であり、そのため慶勝は藩士・領民の期待を背負い藩主の座に就く事となった。慶勝は藩主となり「政事旧弊ノ一変」を掲げ、家柄にとらわれない人材登用の実施、海防力の強化など様々な藩内改革を行った。その中でも特異な政策が、嘉永６年（1853）に貧窮した藩財政を藩の年寄を通

じ商人に公開し、協力を仰いだ事であった。櫻井は慶勝が藩財政を公開した政策について「身分制度が厳然としている江戸時代に武家の重役が領民に直接財政支援を懇願するのは、『破天荒で稀有なこと、時勢の変、新例を開く』などと評される珍しい方法であった」と論じている（櫻井 2008：122,124）。慶勝が旧時代の常識に左右されず、柔軟な考えを持つ人物であった事が想像される。

又、次の事例からも慶勝の柔軟な考えを読み取る事ができる。NHK プラネット中部編『写真家大名・徳川慶勝の幕末維新 尾張藩主の知られざる決断』によれば、元治元年（1864）７月 24 日、禁門の変を引き起こした長州藩を追討する為、朝廷は幕府を通じて中国、四国、九州の 21 藩に対し出陣命令を出し、その総督として慶勝を命じた。慶勝が率いた軍勢の進む速度は遅く、長州への前線基地である広島に到着したのは総督に任命されてから１か月半後の事であった。慶勝は西郷隆盛らに恭順工作を進めさせ、最終的に長州藩との戦闘に至る事なく征討を終結させている。慶勝が当時、日本が内戦状態に陥りその間隙を縫って欧米列強が軍事的に進出してくる事を憂慮していた事から、長州征討にも慶勝なりの征討終結の意図があったと考えられる（NHK プラネット中部 2010）。

以上の慶勝の政策から読み取る事ができる彼の考え方を基に、慶勝が描いた金鯱献上の在り方について考察する。激動する幕末期において新政府の登場、台頭となるにつれ慶勝は尾張藩の立場とともに金鯱の立場も考えざるを得なくなったと思われる。それは金鯱が尾張徳川家の威厳を示すもので、新政府が作る新たな世には不必要であったと考えられるからである。井上が論じるように過去の３度の改鋳を踏まえ慶勝が新政府に金鯱を潰した状態で献上しようとしたかは判然としない。しかし、慶勝が金鯱を献上した背景には新政府に対し恭順の意を示そうとした意図があったと考えられ、金鯱を全て潰し献上するという奇抜な発想は柔軟な考えを持ち、旧来の常識に左右されない慶勝であったからこそ考えついたものであったと考えられる。

尾張の人々にとっても金鯱が地上に降下する事は異例の事態であっただろう。先述の通り過去３度に

画像２ 金鯱献納

おいて改鋳された金鯱であったが、決して改鋳は公に行われたわけでなくその事実を把握していた人々は少数であったと考えられる。井上も金鯱が改鋳された事は極秘とされ、強い緘口令がしかれていたと想定している（井上 2005）。こうした背景を持つ人々は金鯱が地上に降ろされ、献上されるという事実に非日常を感じたと考えられる。

明治４年（1871）４月、金鯱は天守から降ろされ、同年６月７日には雌雄それぞれ木綿の布団で包まれ、木箱に入れられ東京へ運び出された。（画像２）実は、金鯱が天守から降ろされた同年同月、名古屋藩知事を免官になった慶勝が東京へ出立し東京浅草瓦町別邸へ移った。尾張の人々は金鯱と元藩主であり元藩知事である慶勝という尾張国を代表するもの・人の移動をほとんど同時期に経験していた。尾張の人々は、旧時代の終焉と新しき世の始まりを否が応でも感じずにはいられなかっただろう。

尾張の人々にとって非日常を経験させた金鯱献上は、尾張の人々の金鯱に対する意識を大きく変化させたと考えられる。尾張の代名詞であった金鯱はその権威を奪われるようにして新政府に手渡され、尾張の人々からは「零落した存在」としてその姿は映ったと考えられる。

第４章　金鯱巡回

「アー尾張大納言さんの金のしゃちほこのいうことときけばエー

アー文明開化の世となりて高い城からおろされて

とがない私に縄をかけ
　離ればなれの箱のうち蒸汽船にとのせられて東京までもおくられて
　博覧会にさらされて幾十万の人々にしゃちじゃしゃちじゃと指さされ
　こんなにくやしいことはない一そ死んだがましかいな一人で死ぬのはよけれども
　お前と一しょに死んだなら人がしんちゅうじゃとヨーホホアーいうであろうエー」
（井上 2005：150,151）

これは金鯱が不当な扱いを受けた事に対する尾張の人々の不満が込められた『名古屋甚句』である。金鯱は献上された後、保管を任された宮内省によって潰される事なく省内の倉庫に放置されていた。しかし献上された翌年、明治５年（1872）３月に東京湯島聖堂で開催された日本初の博覧会に雄鯱が出品され、その後、雄鯱は兼六園で開かれた金沢博覧会、さらに北陸・西日本など各地をまわった。

兼六園については、明治７年（1874）５月に明治政府の「各地の『古来の勝区名人の旧跡等』を『公園』指定し、『万人偕楽の地』とする」方針から公園に指定され、一般の人々に開かれた場となっていた[(3)]。明治政府が金鯱を人々が多く集まる場で展示させ、見世物とした事が兼六園の例からもわかる。

一方、雌鯱は明治６年（1873）にオーストリア、ウィーンで開催されたウィーン万国博覧会に出品された。（画像３）ウィーン万国博覧会での金鯱出品では、お雇い外国人であったアレクサンダー・フォン・シーボルトの助言により日本のエキゾチックな文化を欧州に届ける作品の一品としてその出品が行われた（村田 2014）。

こうして各地を巡回した金鯱であるが、新政府にとって金鯱は「戦利品」としての意味を持っていた。湯島聖堂で行われた博覧会での金鯱の展示は「全国に知られた尾張藩のシンボル『名古屋城の金鯱』が新政府の手にあることを公にして、国民に今の為政者が誰であるのかを知らしめ」る為のものであった（名古屋城調査研究センター 2021：37）。湯島聖堂での博覧会の様子を描いた『古今珎物集覧元昌平坂聖堂於て』（画像４）では数ある珍物の中で、金鯱が絵画の中心に描かれた。博覧会における金鯱の人気は高かったようであるから、金鯱は博覧会の目玉として、そして新政府が意図した様に戦利品としての見世物の役割を十分に発揮したと思われる。

画像３ 日本列品所

画像４『古今珎物集覧元昌平坂聖堂於て』

ただ、尾張の人々からすればひとたまりもない。人々の不満はやがて名古屋における金鯱復帰運動の原動力となり、明治 11 年（1878）には事が大きく動き出す。同年６月 10 日、伊藤次郎左衛門、関戸守彦、岡谷惣助ら名古屋の資産家が代表し宮内省に金鯱返還を願い出たのだ。彼らは金鯱が城へ戻る際に必要な経費全てを有志で支払うと言明しており、こうした発言からは尾張の人々の金鯱への強い思いが感じられる（井上 2005）。同年９月４日、人々の願いは実を結び、宮内省は金鯱返還を許可した。金鯱は故郷へ戻り愛知県博覧会への出品、名古屋城への復旧作業、金鯱自身の補修を経て明治 12 年（1879）2 月 13 日に再び天守の上に鎮座したのだった。

金鯱は新政府の策略によって様々な場所へ“鯱質”として連れまわされ、仰ぎ見られる対象から見世物へと成り果てた。金鯱は「尾張の象徴」の地位を利用される事となったのだった。こうした金鯱の

巡回は、尾張の人々が新政府から金鯱を取り戻そうとする契機となり、金鯱復帰運動、金鯱返還へと繋がった。金鯱が尾張徳川家の手元を離れ、それが見世物とされる事で尾張の人々は改めて金鯱が心の拠り所であった事を自覚させられたのではないだろうか。そして金鯱を市民の手で取り戻すという「市民」の立場を主軸とした金鯱に対する意識の変化が起こったと考えられる。金鯱は「市民の心の拠り所となる存在」へと変化したと考えられる。そこには尾張徳川家の威光を示す金鯱の姿はなかった。

第５章　金鯱と厄災

昭和 20 年（1945）５月 14 日、名古屋空襲により名古屋城が炎上した。（画像５）当時の『中部日本新聞』は「金鯱城遂に焼失 暴爆・中京市民の痛憤」（『中部日本新聞』昭和 20 年５月 16 日）と題し、その様子を伝えている。空襲では焼夷弾が雨あられの如く降り、銅板でできていた屋根は緑色の炎を上げ、黒煙であたりは真っ暗になった。真黒な空には真赤な炎が何十メートルと天に立ち上った。その姿は「三百年の歴史を秘めたお城が空の魔物に吸い上げられるよう」であったという（名古屋空襲誌編集委員会 1979：9）。

画像５ 名古屋城炎上

当時金鯱は土中に埋めて難を逃れる計画があり、金鯱を天守から降ろす為に三層の窓から頂上まで足場が組まれていた。はじめに雌鯱を三層まで降ろし、その次に雄鯱を降ろそうとした所で空襲にあった。天守が炎上したのは、焼夷弾の一つが足場の木に引っ掛かった、或いは開いていた窓から焼夷弾が入ったといったように語られる。

そして天守が炎に包まれる中、金鯱も又、城と運命を共にした。当時名古屋城へ勤務し、名古屋城の管理責任者で副監視長であった原田尊信は「鯱の金はカレー粉のようなものとして残って」いたと記している（名古屋空襲誌編集委員会 1979：7）。

又、天守台の石垣から舞い上がった火の粉を見た長谷川園子は金鯱が落ちる様子を見て「『今、鯱が落ちたんだな。これで城も成仏した』と悲しみに暮れた」という（名古屋空襲誌編集委員会 1979：30）。同年５月 17 日の『中部日本新聞』では、原型をとどめない金鯱一匹が発見された事、もう一匹の金鯱が未発見である事が報じられ空襲後の無残な鯱の姿を人々に示した（『中部日本新聞』昭和 20 年５月 17 日）。

敗戦後、混乱が落ち着くと名古屋城再建の声が民間から上がるようになる。名古屋市は大天守と小天守の鉄筋コンクリートによる再建に向け、昭和 29 年頃から実測図を基に設計図づくりに取り掛かり、それと共に新たな金鯱の復元も進められた。

名古屋城再建の背景には再建に不足した金額収集の為に立ち上がった有志会「名古屋いっこく会」の力添えがあった。「名古屋いっこく会」は 23 人の商店主等によって結成され「いっこく」という言葉は頑固者を意味し、そこには「『一刻も早い再建を』という願いと、自分たちは『一国一城の主である』というプライド」が込められた（NHK プロジェクト X 制作班 2005：20,21）。明治期における金鯱復帰運動同様市民の力によって金鯱はその地位の復帰を果たした。

実は金鯱の炎上以前に真偽不明を含め４度鯱の鱗が盗まれている。その中でも特に著名なものが「昭和の金助」事件である。当時の東京朝日新聞では「無

残、名古屋城の金鯱鱗五十八枚剥奪さる 四十萬圓の空中怪盗〝大凧の金助〟以來」（『東京朝日新聞』昭和12年1月8日）と報じられた。又、金鯱の鱗に関して、「案外もろく腐った魚の鱗の様に指でぽろぽろ簡単に脱落した」とが記述され、金鯱の価値を低下させる情報が全国に報じられた（『東京朝日新聞』昭和12年1月29日）。

人々は金鯱炎上、金鯱盗難という苦い経験を乗り越える事で金鯱にかける想いがより強固なものとなったと考えられる。炎上後の「名古屋いっこく会」の活動は、城の再建を含め金鯱に対する強い想いが表れた活動の代表的なものであろう。名古屋城は二度と燃えないように願いが込められコンクリートで再建され、金鯱も同様に耐久性が考慮され、心木にあたる原型部分がブロンズにされる事が決められた。

金鯱炎上や金鯱盗難は新政府より心の拠り所を取り戻した尾張の人々に更なる試練を与えた出来事であった。しかし、そうした苦難を乗り越えたからこそ、人々は「名古屋市民の象徴」として、金鯱を強く意識したと考えられる。

第６章　金鯱降臨

戦後、天守に舞い戻った金鯱は３度地上に降りてきた。『金鯱の歴史』[4] によると、１度目は昭和59年（1984）秋、名古屋城天守閣の再建25周年を記念して降下し、「金シャチとの出会い」をテーマに金鯱は特設された高さ20メートルのテント張りの「金シャチパビリオン」内に展示された。２度目は平成17年（2005）、同年３月19日から６月19日に名古屋城内で開かれた新世紀・名古屋城博で展示され、愛知万博開会式においても披露された。金鯱が万博で披露されるのは、初代金鯱が明治６年（1873）のウィーン博覧会に出品されて以来132年ぶりだという。又、二の丸広場の特設パビリオンである「金シャチドーム」に搬入された金鯱を公募で選ばれた市民150人が３月６日に「金シャチみがき隊」として磨き上げた。新世紀・名古屋城博で展示された金鯱に入場者は直接手で触れる事ができたという。そして３度目が令和３年（2021）に行われた「名古屋城 金鯱展」、「名古屋城金シャチ特別展覧」である。先述の通り、コロナウイルス感染拡大という事態に疲弊する人々の支えになる事が使命とされ降下した。「名古屋城金シャチ特別展覧」では２度

画像６ 愛知県金鯱のカントリーサイン

画像７ 駅構内にある金鯱モザイク画
（寄贈 名古屋地下鉄名店街組合連合会）

目の降下同様に金鯱に触れる事ができ、その入場者数は令和３年６月21日で８万人に達した。８万人目となった小牧市在住の親子は「（中略）（金しゃちを触ってみて）ツルツルしていた硬かった。迫力があった」と話す[5]。又、同展実行委員会のメンバーである山田興睦は「金しゃちは名古屋の人にとって誇りでありアイデンティティーでもある。金しゃちに触れた後には皆さん笑顔になる」と話した[6]。

名古屋の街に目を向けると、あらゆる場所に金鯱が溢れている。愛知県のカントリーサイン（画像６）、駅構内の壁（画像７）など、様々な場所で金鯱はデフォルメされ、活用されている。こうした金鯱は尾張の人々にとって親しまれ、愛される「アイドル的な存在」であると考えられる。かつて天守の頂上に鎮座し、仰ぎ見られた金鯱は時代を経て尾張の人々にとって身近な存在となり、現代においてその地位を獲得していった。

終章

これまで金鯱と尾張の人々との関係をその歴史的変遷と、意識変化を起こした事象を挙げ考察してきた。金鯱はかつて旅する人々にその姿を仰ぎ見られ、人々に尾張徳川家の権威を知らしめた存在であった。こうした金鯱は、尾張国を除く金鯱炎上を契機とし尾張の人々に「尾張を象徴する存在」として金鯱を意識させた。だが、激動の時代であった幕末期において金鯱は新政府に恭順の意を示す為に献上され、尾張徳川家の権威という意味付けが失われた事、鯱が城から降ろされた事実からも尾張の人々は「零落した存在」として金鯱を意識するようになったと考えられる。しかし人々は金鯱献上後、湯島聖堂をはじめとした日本各地で行われた巡回を経て金鯱を自らの手で取り戻す事となる。こうした行動を通じ、金鯱との関係をより強固なものとし尾張の人々にとって金鯱は「市民の拠り所となる存在」へと変化した。その後、人々は金鯱盗難・炎上という苦難と向き合う事となるが、苦難を乗り越え再び金鯱を建造する事で金鯱を「名古屋市民の象徴」として金鯱を意識していった。そして、現代において金鯱はデフォルメの対象となり、より市民にとって身近な存在である「アイドル的存在」へと変化したのである。金鯱は人々にとって「高尚な存在」から時代を経てより身近な存在である「アイドル的な存在」へと変化したという事が以上の事から結論づける事ができると考える。

尾張名古屋の金鯱は、現在、再び天守に鎮座し名古屋の街を見守っている。金鯱には「厄除け」の他に「平和」の意味が込められているという。尾張の象徴である金鯱が、新型コロナウイルスに苦しむ世界の全ての人々の苦難を払うとともに、再び世界に平穏が訪れる事を願う。

注

（1）中日新聞社（編集）「名古屋城金シャチ特別展覧 公式ガイドブック」(『金鯱の歴史的意義』千田義博 p.16-p.23) 名古屋城金シャチ特別展覧 実行委員会 2021 年
（2）中日新聞社（編集）「名古屋城金シャチ特別展覧 公式ガイドブック」(『金鯱の歴史』p.32-p.59) 名古屋城金シャチ特別展覧実行委員会 2021 年
（3）鷲田清一 (編者)「大正＝歴史の踊り場とは何か 現代の起点を探る」(『公園』渡辺裕 p.243-p.244）株式会社講談社 2018 年
（4）注（2）に同じ
（5）サカエ経済新聞「『名古屋城金シャチ特別展覧』来場者 8 万人に 栄で 7 月 11 日まで開催」(2021.06.22）https://sakae.keizai.biz/headline/3243/（最終閲覧日 :2021.10.15）
（6）注（5）に同じ

画像

画像 1 中山道広重美術館ホームページ
https://hiroshige-ena.jp/exhibitions/20180125 より引用（最終閲覧日 :2021.10.12）
画像 2 外国史料に見る 日本万国博覧会への道 外務省外交史料館展示室
https://www.mofa.go.jp/mofaj/annai/honsho/shiryo/banpaku/pdfs/banpaku_kaisetsu.pdf
より引用（最終閲覧日 :2021.10.12）
画像 3 東京国立博物館 2. ウィーン万国博覧会 近代博物館発展の源流
https://www.tnm.jp/modules/r_free_page/index.php?id=145 より引用（最終閲覧日 :2021.10.12）
画像 4 ABC 古典籍ポータルデータベース『古今珎物集覧元昌平坂聖堂於て』
https://jpsearch.go.jp/item/arc_books-chi05_04413 より引用（最終閲覧日 :2021.10.12）
画像 5 毎日新聞 写真特集 名古屋城 金シャチは「2 代目」大空襲で焼失、再建（2015 年 5 月掲載）(2013.03.28）
https://mainichi.jp/graphs/20160801/hpj/00m/040/002000g/7 より引用（最終閲覧日 :2021.10.12）
画像 6 筆者が撮影（撮影日 :2021.08.15）
画像 7 筆者が撮影（撮影日 :2021.08.16）

参考文献

井上章一 2005『名古屋と金シャチ』NTT 出版株式会社
木下直之 2007『わたしの城下町 天守閣からみえる戦後の日本』株式会社筑摩書房
櫻井芳昭 2008『幕末の尾張藩』中日出版社
中日新聞社（編集）2021『名古屋城金シャチ特別展覧 公式ガイドブック』名古屋城金シャチ特別展覧実行委員会
徳川義崇（監修）2014『写真集 尾張徳川家の幕末維新 徳川林史研究所所蔵写真』株式会社 吉川弘文館
名古屋空襲誌編集委員会（編集）1979『名古屋空襲誌第 6 号』名古屋空襲を記録する会村田麻里子 2014『思想としてのミュージアム ものと空間のメディア論』人文書院
森零（監修）2013『名古屋空襲を語る 零からの一歩』名古屋活動写真
山田秋衛 1970『特別史蹟 名古屋城』名古屋城振興協会
鷲田清一 (編者) 2018『大正＝歴史の踊り場とは何か 現代の起点を探る』株式会社講談社 NHK プラネット中部（編者）2010『写真家大名・徳川慶勝の幕末維新 尾張藩主の知られざる決断』日本放送出版協会
NHK プロジェクト X 制作班（編者）2005『プロジェクト X 挑戦者たち 29 曙光 激闘の果てに』日本放送出版協会